

福山分校の歴史を閉じるに当たって
前教育学部福山分校主事 藤谷 健



昭和26年頃の福山分校正門及び校舎

教育学部福山分校は、平成元年8月に東広島市の新キャンパスへの移転作業を行い、9月30日をもってその使命を終わり、10月1日から新しい教育学部の一部として活動を開始しました。これまで、学長をはじめ、学内諸部局及び事務局の皆様がたから寄せられた温かい御指導と御援助に対して、ここに厚く御礼申し上げる次第です。そこで、福山分校という、遠隔地に存在した一小部局の歩いた40年の歴史をたどることによって、御挨拶に代えさせていただきたく存じます。

教育学部福山分校は昭和24年5月広島大学開学と同時に、広島女子高等師範学校と広島青年師範学校を母体として、教育学部安浦分校福山教場として発足し、翌25年5月教育学部福山分校と改称され、今日まで40年の歴史を刻んで参りました。発足当初の福山分校には、音楽科、体育科、家政科、農業科、職業科が置かれていましたが、農業科はのちに募集を停止し、職業科は東雲分校（現学校教育学部）へ移管して今日の形になりました。福山分校の校地は、元陸軍歩兵第41連隊の跡地

で、敗戦後は戦災等で庁舎を失ったいくつかの官公庁、学校が同居していたところですが、開学後も拘置所だけは残っており、大学としてはあまり好ましい環境ではなかったようにも聞いております。当然のことながら、当時の研究・教育の設備は貧弱で、予算は乏しく、その中で苦闘され成果を挙げられた先輩諸氏の御苦労に対して、心から敬意を表したいと思います。しかしながら、14ヘクタールという広い校地の中で、山羊が悠然と草を食んでいたという長閑なキャンパス風景も、県東部



昭和63年の福山分校校舎

の小都市（当時の福山市の人口は7万程度）なればこそ見られたのかもしれません。

その後、広島大学は着々と整備が進み、それに伴って福山分校も整備されては来たのですが、その速度は他の部局よりも遅かったようです。その原因は、福山分校が教員養成課程の学科制という、制度的にも予算的にも広島大学の中で最低に近い位置に置かれていたことにあります。それを端的に示すのが大学院整備の遅れで、政経、工、水畜産の各学部が続々と修士講座制へ移行し、教育学

部内でも、五教科に博士課程が置かれるところまで来たにもかかわらず、福山分校には昭和44年にわずか3講座の修士課程が設置されたまま、長い間放置されていました。そして、紛争を契機とした大学改革の流れの中で、昭和53年の改組を迎え、やっと予算的にも他部局並みとなり、施設設備の整備も進んで来ました。ところが、この学部改組による広島と福山のカリキュラム上の統合は、もうひとつ別の問題を引き起こしました。というのは、これによって福山分校教官のうち、五教科及び教育学、心理学に所属する教官14名が、広島地区の授業を併せて担当することになり、週2日程度の広島出講が始まったからです。100km以上離れた福山広島間の往復は、移転統合が完了する直前の今年7月まで10年間続き、これらの教官は身も心も疲れ果てました。早期移転が望まれた裏には、このような事情もあったのです。

一方、改組ということは、制度としての大学院博士課程を自動的に保証するものではありませんので、次に福山分校が取り組まなければならなかったのは、大学院博士課程の問題でした。いろいろなきさつもありましたが、昭和61年度に音楽、体育、家政は念願の博士課程後期をもつことができました。福山分校は37年かかるべくやっと学内の他の部局と



プール横から見た校舎

肩を並べるところまで来たのです。移転統合以前にこの問題が解決していたのは幸せでした。福山分校がここまで来られたのは、福山

分校の教職員が緊縛一番努力したためであることはもちろんですが、併せて先進諸部局の御理解があったればこそ成し得たことと思っております。

移転ということでは、福山分校には他部局にない前史があります。すなわち、何度も福山分校の広島移転が論じられたということです。昭和25年3月9日の安浦分校の火災のあとも、学生から広島復帰の要望が出され、それが当時の森戸学長の講話で福山移転が強行されたという話を聞いたことがあります。その後も、教育学部3分校の統合問題や、当時の木造校舎の建替え問題ともからんで、昭和20年代末から、広島移転問題は何度となく福山分校の屋台骨を揺らせました。とくに後者については、その頃若手教官を中心に広島移転を主張する声が大きかった中で、当時の池田計三主事の、分校の教官が広島移転に固執するなら自分は主事職を辞したいという発言もあって、最終的には昭和36年5月17日の教官会議で、福山分校の現構内へ本建築を行うという態度決定を行っています。そして、昭和38年度から42年度にかけて鉄筋校舎が落成しました。つまり福山分校は、一度は福山の地に永住を決めたといきさつがあるのです。また昭和38年度からは、水畜産学部すなわち現在の生物生産学部が同じキャンパスへ移転して来て、その後四分の一世紀にわたるお隣り付き合いとなりました。しかし、遠隔地にあっては総合大学のメリットも少なく、



中央　カンパンを外すところ

逆に会議出張などでの時間の浪費のみが目立って来ました。時の流れは構成員の顔ぶれを変えるばかりでなく、その意識まで変えます。とくに大学紛争後の広大の改革の大きなねりの一環としての西条キャンパスへの統合移転については、既に過去のこととして、今日では話題にもならない従来のいきさつは、遂に顔を出すことなく、スムーズに今日の移転を迎えたと言ってよいでしょう。

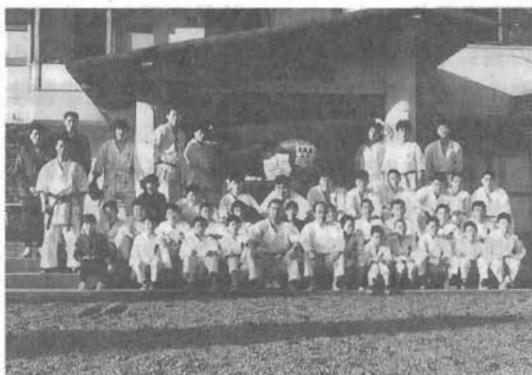
かつては広島大学の中に幾つもあった分校という組織も、三原分校の東雲分校への合併や教養部の成立、そして東雲分校の学校教育学部としての独立などで、昭和53年以降福山

分校が唯一の分校として広島大学の中に存在していました。それが今度廃止にならたのです。分校というのは誠に中途半端な組織であるにもかかわらず、広島大学においては学内の管理運営に、分校を部局に準ずる扱いをして下さったことは、非常に有難いことでした。最後に、これまで学内諸部局から福山分校に対して寄せられた御厚意に重ねて謝意を表するとともに、福山分校の移転に際して一致協力してこれに当たり、予定どおり無事故で成し遂げて下さった前福山分校教職員諸氏に心からのお札を述べさせていただいて擱筆します。

サークル紹介

広島大学体育会空手部

文学部学生 永江真彦



我が広島大学体育会空手部は、今年度で創立34年目を迎える。現在、部員数は17名で、幹部、準幹部の先輩を中心に練習に励んでいる。空手には、糸東流、和道会流、剛柔流、松濤館流、等多数あり、我が部にもいろいろな流派の人間が集まっているが、広大空手部は設立以来、和道会流である。

練習は体育館の1Fにおいて、合気道部、剣道部、柔道部等、主に武道系の部と仲良く場所

を分けあい、月～土曜日の間、二時間集中して行う。どちらかと言えば組手中心の練習だが、ただ、型はすべての基本があるので、師範、監督、OB先輩から、丁重な指導を受けている。

戦績として、過去西日本空手道団体戦で優勝し、昨年度は女子学生日本一を輩出しているのだが、今年は今一歩で敗退しているのでさらに奮起し、部員全員で古豪復活を目指そうと意気込んでいる。今後の空手部に期待してほしい。

さて、体育会と言えば、イコール飲酒、というイメージがあろうが、我が部は先輩全員が飲酒について良心的な理解を示しており、無理に酒を勧めることもせず、泥酔して救急車を呼んだり、正門入って左側にある噴水場で「バサロやります」等といって泳いだりするようなことは全くありえない。(この段落においての文責は負わない。)

また、余談ではあるが、広天空手部はいい男揃いであることを付記しておく。